

漢法苞徳塾資料	No. 546
区分	治療論・鍼法
タイトル	病在五蔵固居者、取以鋒針……をめぐって
著者	八木素萌
作成日	2001.04.20～09.23

I. 前置き

『刺絡』誌「通巻 9 号」の 48 ページに記載されているシンポジウムでの私の質問部分は、「固居」が「固痺」になり、「鋒針」が「蜂鍼」になって印刷されている。録音のテープ起こし段階での誤りと思われるので訂正をお願いしたい。関連する問題について、多少論じておく方が良いと思われるので以下に論じる。

II. 「病在五蔵固居者、取以鋒鍼……」をめぐって

私がシンポジスト、特に島田先生の見解を求めて質問したのは、『靈枢』官鍼第 7 に

「病在五蔵固居者、取以鋒鍼、瀉于井滎分輸、取以四時……」

(訓：病 五蔵ニ在ッテ固居スル者ハ、取ルニ鋒鍼ヲ以ッテシ、井滎分輸ヲ瀉セ、四時ヲ以ッテ取レ……①)

とあるフレーズ部分の解釈問題であった。

これはすぐ前の文の、九鍼について記述している所が続いて記述されているものである。しかも、その九鍼全体を記述している文には「鑱鍼」「員鍼」の記述があり、続いて

「……病在経絡痼痺者、取以鋒鍼、……」

(訓：病 経絡ニ在ッテ痼痺アル者ハ、取ルニ鋒鍼ヲ以ッテセヨ……②)

と述べているのである。そして最後の「大鍼」を述べた後に、再び「鋒鍼」を述べている所にこの文がある。したがって「病在五蔵固居者、取以鋒鍼……」云々の部分には、九鍼に関する他の記述に較べて、格別の重みがあるものと受け止められる。

① 1. 鋒鍼……………三稜鍼のこと

井滎分輸……………要穴のことと解す

固居者……………固定的に所在している者

四時……………春夏秋冬の四季のこと

② 2. 痼痺……………慢性化した痺の症状のこと

III. 神客者 正邪共会也との関連（病とは？）

また『靈枢』終始第9では

「治病者先刺其病所従生者也、春氣在毛 夏氣在皮膚 秋氣在分肉 冬氣在筋骨、刺此病者、各以其時為齋……」

（訓：病ヲ治スルモノハ先ズ其ノ病ノ從ガイ生ズル所ヲ刺スナリ、春氣ハ毛ニ在リ 夏氣ハ皮膚ニ在リ 秋氣ハ分肉ニ在リ 冬氣ハ筋骨ニアリ 此ノ病ヲ刺ス者ハ 各其ノ時ヲ以ッテ齋シク為ヨ……③）

と記述している。

『靈枢』の他の篇にも、『素問』の中でも、表現には多少の異同があるが、診療に際して「時氣」もしくは「季節の影響」を重視すべきことを指摘している。このような記述には予後の判断（④）も含んでいる。『素問』にも『靈枢』にも、「時氣」もしくは「季節の影響」に関する記述が、それぞれホボ40篇前後に及んでいるのである。

- ③ 分肉……二説あり。体表から観察できる筋肉と筋肉の境目の所と解する説と、皮毛腠理と肌肉の境目の部分と解する説の二説であるが、ここでは後者を採りたい。
春氣在毛の「毛」……………「皮毛」に相当しよう。
夏氣在皮膚の「皮膚」……「腠理」に該当しよう。

- ④ 病は季節の変化に対応してその消長が「法則的」に変化している。この見地は『素問』玉機真藏論第19の記述を軸に諸篇に展開されている。『難経』は「十三難」の記述が軸となっている。双方ともに「相剋關係に剋している所から剋されている所に伝変する」と見ている。しかも、これは季節や時間などの変化の中に表現されている陰と陽の消長に関連するという論が基底にある。

診察と治療に際して「時氣」もしくは「季節の影響」を考慮すべきであるとする記述は、『靈枢』小鍼解第3の

「神客者 正邪共会也 神者正氣也 客者邪氣也 在門者 邪循正氣之所出入也……」

（訓：神ト客トハ正ト邪共ニ会スルナリ 神トハ正氣ナリ 客トハ邪氣ナリ 門ニ在リトハ邪 正氣ノ出入スル所ヲ循ルナリ……⑤）

という考え方や、『素問』瘧論第35に見られる

「衛氣之所在 与邪氣相合 則病作 故風無常府 衛氣之所発 必開其腠理 邪氣之所合 則其府也……」

（訓：衛氣ノ在ル所邪氣ト相イニ合ッスレバ病作コル 故ニ風ニ常府無シ 衛氣ノ発ッスル所必ラズ斯ノ腠理開ク 邪氣ノ合ッスル所 則チ其ノ府ナリ……）

という観察に、関連が強いものと思われる。

この観点は『難経』七十四難にも見られる。

「経言 春刺井 夏刺榮 季夏刺俞 秋刺經 冬刺合者 何謂也 然 春刺井者 邪在肝 夏刺榮者 邪在心 季夏刺俞者 邪在脾 秋刺經者 邪在肺 冬刺合者 邪在腎……」

(訓：経ニ言フ 春ニハ井ヲ刺シ 夏ニハ榮ヲ刺シ 季夏ニハ俞ヲ刺シ 秋ニハ經ヲ刺シ 冬ニハ合ヲ刺セトハ 何ノ謂ゾヤ 然フ 春ニ井ヲ刺スハ 邪 肝ニ在リ 夏ニ榮ヲ刺スハ 邪 心ニ在リ 季夏ニ俞ヲ刺スハ 邪 脾ニ在リ 秋ニ經ヲ刺スハ 邪 肺ニ在リ 冬ニ合ヲ刺スハ 邪 腎ニ在レバナリ……)

「其肝心脾肺腎 而繫於春夏秋冬者 何也 然 五藏一病 輒有五也 假令肝病 色青者肝也 臊臭者肝也 喜酸者肝也 喜呼者肝也 喜泣者肝也 其病衆多 不可盡言也 四時有數 而竝繫於春夏秋冬者也」

(訓：其ノ肝心脾肺腎ニシテ春夏秋冬ニ繫ルトハ 何ゾヤ 然ウ 五藏^{ヒトツヤ}一病^{スナワチ}メバ 輒^{スナワチ}五アレバナリ 假令^{タトウレ}バ肝病ニハ 色 青ナルハ肝ナリ 臊臭ノモノハ肝ナリ 酸ヲ喜^ヨノムモノハ肝ナリ 喜^ヨク呼ブモノハ肝ナリ 喜^{ナミダ}ク泣スルモノハ肝ナリ 其ノ病衆多ニシテ 盡^{コトゴト}ク言フベカラザルナリ 四時ニ數^{スウ}有リテ 春夏秋冬ニ竝^ナラビ繫ルモノナリ…
…⑤6)

と言う。

⑤ 5. 在門者の「門」……正氣之所出入という記述からツボのことを言っているのが判る。

これは「衛氣之所在 与邪氣相合 則病作」という記述からも明らかであろう。

⑤ 6 a. 「數」^{スウ}……法則、規則の意。『黄帝内経』では季節の氣が所在する所を、毛・皮膚・分肉・筋骨としている所と、皮毛腠理・血脈・肌肉・筋・骨のようにしている所や、春一經脈、夏一孫絡、長夏一肌肉、秋一皮膚、冬一血氣在中、内著骨髓、通于五藏のように観ている所などがある。然し、『難経』では、皮毛腠理・血脈・肌肉・筋・骨に決めていて、この五体の各部は井・榮・俞・經・合などの要穴に絞り込んで関連性を見ている。つまり、氣の所在する五体の部分は、春が最も浅く冬には最も深いものと、両者ともに観察している点が重要であろう。

- ② 6 b. 『靈樞』終始第9の記述と『難経』七十四難の記述は近似的である。しかし、『素問』四時刺逆從論第64で

「春氣在經脈。夏氣在孫絡。長夏氣在肌肉。秋氣在皮膚。冬氣在骨髓中……
 春者。天氣始開。地氣始泄。凍解冰積。水行經通。故人氣在脈。
 夏者。經滿氣溢。入孫絡受血。皮膚充實。長夏者。經絡皆盛。內溢肌膚中。
 秋者。天氣始收。腠理閉塞。皮膚引急。
 冬者。蓋藏。血氣在中。內著骨髓。通于五藏。……」

などのようにになっている。取穴論においても、〈春一榮。夏一俞。長夏一經。秋一合。冬一井〉としている記述が大部分になっている。明らかに『難経』の取穴とは異なっている。ちょうど1シーズンずれている。ここでは生命への季節の気の作用を〈成長。化。収。藏〉として捉える。その捉え方の共通性が重要のように思われる。

これらの論点を整理すると、

- ① 人身には四季に応じた気の所在部がある。そして、その人身における気の所在部は、また、季節の気＝時気の在るところでもある。
- ② その人身における気（「季節の気」＝「時の気」）が所在しているのは、〈五行〉的に、季節に対応し、五藏に対応し、ツボ〈要穴〉の五行や経絡の五行にも、また、五体論の各部位の深さ〈皮毛―肺。金・血脈―心。火・肌肉―脾。土・筋―肝。木・骨―腎。水〉に配当されている五行にも対応して循環している。それには法則的な意味があるものと認識されている。
- ③ それは、邪気の所在部位ともなるものである。
- ④ 『難経』はその部位に井・榮・俞・經・合の要穴の意味を重ね合わせて、さらに春―肝―井・夏―心―榮・季夏―脾―俞・秋―肺―經・冬―腎―合の対応が法則的な意味合いを帯びていると主張した。
- ⑤ これらの事柄の具体的な発現は、経絡システムを介して行われている。
- ⑥ それは

「神ト客トハ正ト邪共ニ会スルナリ 神トハ正氣ナリ 客トハ邪氣ナリ 門ニ在リト
 ハ 邪 正氣ノ出入スル所ヲ循(メグ)ルナリ」
 「衛氣ノ在ル所邪氣ト相イニ合ッスレバ病(ヤマイ)作(オ)コル」
 「衛氣ノ発(ハ)ッスル所必ラズ斯ノ腠理(ソウリ)開ク 邪氣ノ合ッスル所 則チ其ノ府ナリ」

と記述されている機構、つまり「経絡システム」に拠っている。

⑦生氣（＝元氣・精氣）の発する「門」＝「ツボ」に「邪氣」が「俱に会う」＝「同居する」のが病である。

⑧これらは『素問』通評虛実論第 28 の

「……邪氣盛則実 精氣奪則虚……」

（訓：邪氣盛ンナレバ実 精氣^{ウバフ}奪ルレバ虚……）

という論述と見合っている。

⑨「病在蔵」は「器質的な病」であり、「固居者」とは「固定的に所在している者」ということであろう。であればこそ、法則的に邪氣が固着しやすい部分で「邪を除く」のであろう。此の点に「要穴における」鋒鍼刺の大切さを述べる意義があるのではないだろうか！

⑩『黄帝内経』には「四時^{フシ}有數 而竝繫於春夏秋冬者也」（七十四難）のような発病機構についての観念の他に「季節の大過不及の場合についての観察」や、「乱氣」と述べているような発病機構についての観念が『靈枢』五乱第 34 に記述されている。そこには誤治や不節制によって「乱氣」が生じることが論じられているのである。そして、これに対応する鍼法も記述されている。

等々のように言い直しても良いだろう。

IV. 補瀉泄除の法と導氣鍼法との関連問題

『靈枢』九針十二原第 1 に述べている

「……虚則実之 満則泄之 宛陳則除之 邪勝則虚之……」

（訓：虚スレバ之^{マシ}ヲ実セシメ 満ナレバ之^{マシ}ヲ泄シ 宛陳ナレバ之^{ウツチン}ヲ除キ 邪勝レバ之^{マサ}ヲ虚セシム……）

という論は、「補・瀉・泄・除」の四大方法と略されている。これが、鍼灸治療における手法を大別した基本的なものであると認識されてきた。手法論的にも補法の手法手技や瀉法の手法手技が多くの篇に詳述されている。

「宛陳則除之」とは「去血脈」のことであって、今日の三稜鍼を用いて鬱滞している瘀血を瀉血する手法のことであるという解釈が確立された認識となっている。

「邪勝則虚之」とは

「言諸経^セ有盛者 皆瀉其邪也」（『靈枢』小鍼解第 3）

（訓：諸経ニ盛有ル者ハ 皆其ノ邪ヲ瀉スヲ言フナリ……）

という場合の「瀉」と

「満則泄之者 氣口盛而当瀉之也」(『靈樞』小鍼解第3)

(訓：満ナレバ之レヲ^{マツ}泄セヨトハ 氣口盛ナレバ当ニ之レヲ瀉スベキナリ……)

の場合の「瀉」には、診断の問題に差異があっても施術手法は同じものと考えていることが判る記述である。両者ともに今日では「実」だから「瀉」したと言われている状態のようである。

「経有盛」と「氣口盛」とは、本当に同じと見做して良いのだろうか？

両者が同じあると見做せるのであれば「補・瀉・泄・除」の四大方法は「補法・瀉法・刺絡法」の三大方法と言い換えても良いことになろうと思われる。

とすると、「邪勝」＝「諸経有盛」の状態と「満」＝「氣口盛」の状態が同じものと考えているからであろうか？

或いは、用語表現の相違に何の問題もないと解釈しなければならないことなのであろうか？

つまり用語表現の相違は単なる文章の修飾に過ぎないのであろうか？

或いは、「瀉」す手法には差異があることを暗示しようとしたのであろうか？

私には見過ごすにはあまりにも大きな問題のように思えるのである。

ともあれ、これらの四大方法もしくは三大方法と、「乱気」を治療する場合の「同精」とか「導気」の方法とを基本的なものに見做すべきではなかろうか？

この「乱気」に対する鍼法は、

「……徐入徐出 謂之導気 補瀉無形 謂之同精 是非有余不足也 乱気之相逆也……」

(『靈樞』五乱第34)

(訓：徐^{オモムロ}ニ入レ徐^{イダ}ニ出ス 之レヲ導気ト謂フ 補瀉^{カタチ}ニ形無シ 之レヲ同精ト謂フ 是レ^{ユウヨフソク}有余不足ニ^{アラザル}非ナリ 乱気^{ランキ}ノ相逆^{ソウギャク}ナリ……)

と記述されているもの、つまり、「乱気」には「補瀉無形」の「同精」とか、「徐入徐出」の「導気」という鍼法なのである。つまり、経気の流れを良くするとか調えるように措置するといった鍼法であろう。それが「補」でも「瀉」でもなくて【「徐入徐出」の「導気」】なのであると記述されている。

従って、『靈樞』経脈第10の

「不盛不虛 以経取之」(訓：盛ンナラズ虚セズンバ経ヲ以ッテ之レヲ取レ)

や『難経』六十九難の

「不実不虛 以経取之」(訓：実ッセンズ虚セズンバ経ヲ以ッテ之レヲ取レ……㊦7)

というのが該当しているのではあるまいか？

つまり「有余不足」＝「実虚」＝「盛虚」ではない「乱気」と言われている病的状態の場合には「同精」「導気」の方法が適切であるというのである。

まさに「不盛不虚 以経取之」「不実不虚 以経取之」に相当したものではあるまいか！

⑨7.『難経』六十九難の文では「不実不虚～」となり、『靈枢』経脈第10の文では「不盛不虚～」となっている。同じことを論じているようである。

以上